

TRANSITION TO HEALTH (058)

インフルエンザワクチンで免疫力低下

～ 毎年のワクチン接種が細胞性免疫を阻害する！？ ～

はじめに

毎年、ワクチンを打ちながら感染してしまう人がいる一方で、ワクチンを一切打たないのに、何十年もの間、全くインフルエンザに罹らない人も結構いるものです。“毎年、毎年予防接種することで、逆に免疫力が阻害され、より重症化する”という可能性が、2011年11月、皮肉にもワクチン推進派に属するオランダの科学者によって実証され、ウイルス学会誌に発表されました。今回は、その詳細についてもわかりやすく簡単に(?)解説したいと思います。

ワクチン接種でインフルエンザ感染が拡大

2014年の年末、静岡市内のS総合病院で、予防接種していたにもかかわらず、入院患者・病院職員183人がインフルエンザに院内感染した事例については前号でも触れましたが、日本のメディアではほとんど報じられなかった世界的な重大事例がありました。それは、2009年の『**新型インフルエンザ騒動**』の時の事です。この時のパンデミック・インフルエンザA(A/H1N1:新型の豚インフルエンザ)の発生は、当初懸念されていたほど重大なものではなく、流行が温暖な時期にずれたものの、従来の季節性インフルエンザと同等あるいはそれ以下の流行でした。この時、世界的には、誇大に恐怖感が煽られたため、急遽、季節性インフルエンザワクチンの接種が開始されました。ところが、ワクチンを接種した人の間で、インフルエンザ感染が拡大してしまったのでした。そのため、上表の如く、海外では医療関係者による『**ワクチン接種反対運動**』が展開されたり、政府による『**接種禁止措置**』が取られたのでした。このとき、実際にはこの亜型のインフルエンザAには罹ったことのないはずの高齢者では殆んど発症せず、逆にワクチンを接種した若い人・小児に感染が拡大し、重症化し易かったという現象が起こっていたのでした。

2009年新型インフルエンザ騒動の時

2009年7月 **アメリカ** ニューヨーク州の**看護師**団体がワクチン接種**反対**を表明
2009.11.02 **スイス** 妊婦、年少少女、老人に対するワクチン接種・**許可せず**。
2009.11.15 **ポーランド** ワクチン接種**認めず**。
2010.01.04 **フランス** ワクチン接種**禁止**。
ワクチン接種で、インフルエンザ感染が増大し、海外では、反対運動、接種禁止措置が取られたのに、**日本は接種を続けた**。

現行ワクチンには潜在的な欠陥がある

それでは、2011年11月、オランダのエラスムス・メディカル・センターが発表したワクチン学の研究結果について見てみましょう。

この研究の結論を先に申し上げておきましょう。それは、『**子どもに定期的にインフルエンザ・ワクチンを接種すると、子どものインフルエンザと闘う免疫システムが悪化する**』

J.Virol. 2011 Nov; 85(22): 11995-12000. PMID: PMC3209521
doi: 10.1128/JVI.05213-11

Annual Vaccination against Influenza Virus Hampers Development of Virus-Specific CD8⁺ T Cell Immunity in Children^{1,2}

Rogier Bodewes,¹ Pieter L. A. Fraaij,^{1,2} Martina M. Geelhoed-Mieras,¹ Carol A. van Baalen,³ Harm A. W. M. Teekamp,⁴ Annetta M. G. van Rossum,⁵ Fiona R. van der Kleij,⁶ Ron A. M. Fouchier,¹ Albert D. M. E. Osterhaus,^{1,2} and Gaus F. Himmelfarb^{1,2,7}

ウイルス学雑誌 2011年11月 85(22) 11995-12000
インフルエンザに対する年次ワクチン接種は小児におけるウイルス特異的CD8陽性細胞の免疫の発現を阻害する

公益財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原 6 丁目 8 番 1 号

TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

http://www.kenshin-shizuoka.net

E-mail:info@kenshin-shizuoka.net

というものでした。この研究は、毎年ワクチン接種をしている**囊胞性線維症**という疾患を持つ14人の子ども（実験群）とワクチン非接種の27人の健康な子ども（対照群）について、インフルエンザAウイルスに対する特異的**細胞性免疫**（T細胞系）および**液性免疫**（B細胞系）を比較したものでした。ウイルス特異的CD4⁺T細胞と抗体反応（＝液性免疫）は両群に同様に見られましたが、年齢依存的に増加するはずのウイルス特異的CD8⁺T細胞反応（＝細胞性免疫）が、ワクチン非接種の対照群ではみられましたが、ワクチン接種の**囊胞性線維症**の子どもの実験群では見られなかったのです。つまり、**毎年インフルエンザワクチンを接種**することで、ウイルス特異的CD8⁺T細胞反応の形成が**妨害**され、**細胞性免疫が阻害**される可能性があるという結果でした。ワクチンを毎年接種した子どもでは、CD8⁺リンパ球の**活性が低く**、年齢と共に上昇しなかったのです。また、インフルエンザウイルス以外の全てのウイルス感染に対する**リンパ球全体の活性**を比較しても、5歳以下の年齢層では、ワクチン接種児で**低下**している傾向が認められたのです。基本的に**5歳以下の年齢層では、細胞性免疫の発達は不十分で、この時期にワクチン接種のみで抗体を誘導すると、交差免疫の成立が抑えられ、インフルエンザに自然感染した子どもと比較して、亜型のインフルエンザAウイルスの感染に対し、重症化し易い可能性がある、という仮説が成立するのです。**2009年の**新型インフルエンザの流行時に、小児での発症が多かったことも、季節性インフルエンザワクチンを打った人の方に重症化が多く認められたことも、この論文の仮説で説明が可能**なのです。我々壮年者・高齢者（？）の免疫は主に自然感染によっていますので、サブタイプのウイルスに対しても対応可能なのですが、現代の子ども達の免疫はワクチンのみで誘導された場合がほとんどですので、亜型（サブタイプ）のウイルスに対して弱かったのではないかと考えられます。季節性インフルエンザワクチンを、特に5歳以下の子どもに接種した場合には、交差免疫が抑制されてしまい、新型インフルエンザウイルスに対して抵抗できなかった、ということが考えられるのです。結論を申し上げますと、「**ワクチン非接種の子供たちの免疫反応がより強い**」ことが判明したのです。つまり、子どもにおいては「**非接種の方がインフルエンザから身を守る機能がより強い**」ということなのです。この研究のリーダーRogier Bodewes氏は「**インフルエンザワクチンには潜在的な欠陥があり、これまで正当に検討されてこなかった。これについては公の場できちんと議論されるべきだ。**」との趣旨を述べています。CD8⁺T細胞はウイルス感染細胞などを破壊する**キラーT細胞**（CTL）として機能するのですが、毎年**ワクチンを接種**していると、**交叉抵抗性が働く**ということです。つまり、**毎年ワクチンを接種していると新型インフルエンザ発生時にはかえって罹りやすくなる**のではないかと懸念が現実味を帯びてきたのです。

おわりに

一般的に、季節性インフルエンザAに自然感染すると、その後、何年もの間（10年も、20年も）、インフルエンザAを発症しない（感染しても）ことが知られています。ところが、**毎年予防接種を受けていると、季節性インフルエンザA（および鳥インフルエンザ：H5N1）に対する免疫が阻害され、逆に感染し易くなる**ことが、今回の（と言っても5年以上前ですが・・・）オランダのエラスムス・メディカル・センターの研究で実証されたと言えます。現在、健康な子供たちに対し、**年次のワクチン接種**が推奨されています。ところが、インフルエンザワクチンを毎年・毎年、接種すればするほど、次第に**免疫力が阻害され、感染し易くなる**ことが実証されたのです。私は以前から「ワクチンを接種すればするほど、感染し易く、重症化もする」という印象を持っていましたが、これは一介の静岡の健診医の個人的な感想ではなく、普遍的なものといえるのではないのでしょうか。やはり、インフルエンザ対策は、ワクチン接種のみで（効きもしない？）抗体を誘導して逃げるのではなく、一度はしっかりと**自然感染して免疫を獲得**し、その後は**現行のインフルエンザHAワクチンを接種しないで、普段の免疫力の強化に努める**ことが大切なのではないのでしょうか。

おわりに

一般的に、季節性インフルエンザAに自然感染すると、その後、何年もの間（10年も、20年も）、インフルエンザAを発症しない（感染しても）ことが知られています。ところが、**毎年予防接種を受けていると、季節性インフルエンザA（および鳥インフルエンザ：H5N1）に対する免疫が阻害され、逆に感染し易くなる**ことが、今回の（と言っても5年以上前ですが・・・）オランダのエラスムス・メディカル・センターの研究で実証されたと言えます。現在、健康な子供たちに対し、**年次のワクチン接種**が推奨されています。ところが、インフルエンザワクチンを毎年・毎年、接種すればするほど、次第に**免疫力が阻害され、感染し易くなる**ことが実証されたのです。私は以前から「ワクチンを接種すればするほど、感染し易く、重症化もする」という印象を持っていましたが、これは一介の静岡の健診医の個人的な感想ではなく、普遍的なものといえるのではないのでしょうか。やはり、インフルエンザ対策は、ワクチン接種のみで（効きもしない？）抗体を誘導して逃げるのではなく、一度はしっかりと**自然感染して免疫を獲得**し、その後は**現行のインフルエンザHAワクチンを接種しないで、普段の免疫力の強化に努める**ことが大切なのではないのでしょうか。

現行のインフルエンザ**ワクチン**には**潜在的な欠陥**がある（Rogier Bodewes氏）

【結論】

- * 子供に対する**ワクチンの定期接種**は、インフルエンザと闘う**免疫システムを悪化**させる。
- * **ワクチン未接種**の子供たちの方が、**免疫反応がより強く**、今後世界的流行が懸念されるインフルエンザに対しても、**身を守る機能が、より強い**ことが判明した。

年次インフルエンザワクチン接種による免疫システムの悪化とは

細胞性免疫

阻害される
キラーT細胞などができない、働かない

液性免疫

保たれる
B細胞が抗体をつくれるのだが・・・

戦闘に例えるならば・・・

戦闘機、戦車、戦艦、ミサイル発射台がなく、
砲弾、ミサイルなどはあるが・・・
兵士もいない。

丸山作図

